

# あなたの育成牛の繁殖は大丈夫？

11月に酪農学園大学で開催された大動物臨床研究会シンポジウムで、標茶診療所の前野和利獣医師が講演・発表した「育成牛の駆虫が繁殖成績向上に効果を示した一事例」を聞いて、印象に残りましたので、今回はこの内容について紹介したいと思います。

授精すべき月齢を過ぎても発情が見られず、獣医さんに診せたら、卵巣発育不全（卵巣が小さく、卵胞も黄体もない）が多かった農場の育成牛群の事例です。

これらの牛は、体格が小さいなど栄養状態の不良が見られましたので、まず配合飼料の増給、ロールサイレージの給餌場を一つ増加するなどを行ってももらいました。しかし、その後の検査でも卵巣発育不全は治らず、発情を見せることはありませんでした。

何か別の原因もあるのではないかとということ、消化管内寄生虫を疑って糞便を検査してみたところ、コクシジウム、線虫卵や鞭虫卵が見つかりました。そこで背中にかけるタイプの駆虫薬を使用し、駆虫を実施しました。

この結果、駆虫後には間もなく卵巣の発育や発情の発現がみられ、血液検査でも、貧血の改善、

低アルブミンの改善、血糖値の増加など栄養状態が改善されたことがわかり、寄生虫によるものと思われる炎症反応も低下しました。

飼料給与量の増加と駆虫により栄養状態が改善され、発情の発現がみられたので、次からは定期的な駆虫プログラムを作成し、実施しました。すると、育成牛の初回授精月齢が今までより5ヶ月早くなり、繁殖成績の向上が見られました。

以上のことから、育成牛の卵巣発育不全の治療を行うには、まず栄養状態に注意し、発育不良の原因（この場合は寄生虫）を排除・改善することが重要であると、まとめられました。

今回の発表は、すべての農場に当てはまるものではありませんし、育成牛の繁殖が悪いのは寄生虫がいるからと決めつけるわけでもありません。

しかし、育成牛の発情がこない、受胎率が悪いと悩んでいるのであれば、餌を増やしたり、駆虫をしたことがなければ、実施することも考えていいと思います。近年では、12ヶ月で初回授精できる育成牛も多くなってきました。それだけ成長するスピードが速くなっているのだと思います。それ

ゆえに、栄養・飼養管理は難しくなってきたり、んだらうなど私は考えます。

この発表を聞いて、大学時代に寄生虫病学の授業で先生が言っていた「ウシのムシは無視できない」という言葉が浮かんできました。

組合員の皆さんがもう一度、育成牛の栄養、飼養管理を考える機会になれば幸いです。

（阿寒釧路家畜診療課 石川 行一）